

Title	ローザ・パークスとマーティン・ルーサー・キング・ジュニア : モンゴメリー・バス・ボイコット運動以後
Author(s)	森田, 美千代
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.50, 2011.3 : 209-230
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3114
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ローザ・パークスとマーティン・ルーサー・キング・ジュニア

——モンゴメリー・バス・ボイコット運動以後——

森田 美千代

I. はじめに

本稿は、モンゴメリー・バス・ボイコット運動以後の、ローザ・パークス (Rosa Parks, 1913-2005) とマーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr., 1929-1968) との交わりを扱う。言い換えれば、本稿は、キングとの出会い後のパークスの生涯を取り扱うことになる (キングとの出会いまでのパークスの生涯については、別稿で論じているので、それを参照していただきたい⁽¹⁾)。

本稿は、モンゴメリー・バス・ボイコット運動以後の、パークスとキングとの交わりを扱うとはいっても、パークスとキングとの初めての出会いは、運動が始まる前の、一九五五年八月一四日であった。このように、パークスは、実際のモンゴメリー・バス・ボイコット運動が始まる前からキングを知っていた。また、キングに対してポジティブな印象をもっていた。それらのことは、その後のモンゴメリー・バス・ボイコット運動を成功させるうえで重要な要因であったと言つてよいだろう⁽²⁾。

本稿は、まず、キングは、モンゴメリー・バス・бойコット運動を最初から組織し指導したのではなくて、パークス、E・D・ニクソン (E. D. Nixon, 1899-1987)、『ジョ・アン・ロビンソン (Jo Ann Robinson, 1912-1992)』、『フレッド・グレイ (Fred Gray, 1930)』、『ラルフ・デイヴィッド・アバナシー (Ralph David Abernathy, 1926-1990)』が準備した土壌に、後から登場してきたのだということを、そのプロセスをたどることによって明らかにする。

次に、キングとニクソンや、キングとアバナシーとの関係と違って、キングとパークスは、生涯信頼の気持ちを持ち続けたことは真実であるが、キングの非暴力抵抗思想に関しては、パークスは、一定の理解を示しながらも、それには完全には従えないと思いつけていたことも真実である。パークスがマルコム X (Malcolm X, 1925-1965) と出会うことによつてそのことは強められたことを、本稿は明らかにする。

さらに、キング個人ということではないが、組織——例えば、MIA (Montgomery Improvement Association, モンゴメリー改良協会) や SCLC (Southern Christian Leadership Conference, 南部キリスト教指導者会議) など——がもつ性差別 (sexism) について、本稿は示す。モンゴメリーで人種差別のないバスに最初に乗ったのは、キング、アバナシー、ニクソン、白人のグレン・スマイリー (Glenn Smiley) の男性たちであつて、モンゴメリー・バス・boyコット運動を始動させた女性のパークスは、招かれなかった。また、「職と自由のためのワシントン大行進」においても、女性のリーダーたちは、男性のリーダーたちと並んで行進することを許されもせず、演説の依頼も受けなかった。

キングとの交わりということではないが、最後に、次代の黒人の若者を教育することに責任を感じていたパークスが、一九八七年、エレイン・イーン・ステイル (Elaine Eason Steel) とともに、「ローザ&レイモンド・パークス自己開発インスティテュート (the Rosa and Raymond Parks Institute for Self-Development)」を設立したことに触れる。

II. モンゴメリー・バス・ボイコット運動

一九五五年二月一日（木曜日）の夕方、ローザ・パークスは、バスで席を立たなかったことを理由に、人種隔離法違反の容疑で逮捕された。パークスがなぜそのときバスで席を立たなかったのかについて、彼女は疲れていたからだとか、彼女はN A A C P (National Association for the Advancement of Colored People, 全国有色人向上協会) やその他の団体によってそこに派遣されていたからだというようなことが言われているが、⁽⁵⁾ 根本においては、パークスの尊厳と自尊心の感覚 (sense of dignity and self-respect) が、そうさせたのではないか。⁽⁴⁾ つまり、人格を守る権利——人権——の感覚が、パークスにそうさせたのであるというのが、最も正確であると、筆者は思っている。パークスも、「わたしにとつてはそこ「パークスが座っていた席」が、(中略) わたしの人権 (human rights) とは何なのかを、はつきりさせる場であるように思われたのである」と言っている。⁽⁵⁾

パークスは、留置された刑務所から、まず家(夫と母)に電話した。パークスが逮捕されたニュースは、E・D・ニクソンに伝えられた。彼は、黒人弁護士フレッド・グレイに電話したが、この時点では、グレイは、不在であり、連絡がとれなかった。

ニクソンは、パークスに、今回の逮捕をテストケースとして訴訟を起こしてもいいかどうか尋ねた。パークスは、起訴人になることに同意した。⁽⁶⁾

パークスの家から戻ったニクソンは、再びグレイに電話した。グレイは、ジョ・アン・ロビンソンに電話をした。彼女は、キングが牧するデクスター街バプテスト教会 (Dexter Avenue Baptist Church) の教会員であり、またアラバマ

州立大学 (the Alabama State University) の教授であった。さらにロビンソンは、「女性政治協議会 (Women's Political Council)」——これは、人種隔離政策に賛成していた「女性有権者連盟 (the League of Women Voters)」に対抗して、一九四六年に創設されたものであり、統合主義者 (integrationists) からなっていた——のモンゴメリー支部長でもあった。⁽⁷⁾ ロビンソンは、「女性政治協議会」の他のリーダーたちに連絡をとった。彼女たちは、パークスの裁判の日である一二月五日にバス・ボイコットを開始するように呼びかけることに同意した。⁽⁸⁾ ロビンソンたちは、一二月一日 (木曜日) の夜、アラバマ州立大学に集まり、バス・ボイコット呼びかけのチラシを三万五千部作成した。⁽⁹⁾ すべての人間にもましてモンゴメリーのバス・ボイコットを事実上組織したのは、あまり注目されていないが、ロビンソンだったと、ダグラス・ブリンクリー (Douglas Brinkley, 1960) は言う。⁽¹⁰⁾

翌日、一二月二日 (金曜日) の朝五時に、ニクソンはまず、自分が属している第一バプテスト教会 (the First Baptist Church)⁽¹¹⁾ の牧師であるラルフ・デイヴィッド・アバナシーに電話した。アバナシーは、バプテスト派牧師連合 (the Baptist Ministers Alliance) の書記もしていた。アバナシーは、ニクソンに、二人の人物と連絡をとるように提案した。一人はバプテスト派牧師連合の会長である H・H・ハッバード (H. H. Hubbard) であり、もう一人はキングであった。⁽¹²⁾ キング自身は、「私は、何らかの抗議が必要だし、そうなればボイコットは有効な方法だろうという点について、ただちに彼「ニクソン」に同意した」と書いているが、ブリンクリーは、「ニクソンは、キングが慎重な態度を崩さず、⁽¹³⁾ (中略) ボイコット支持に対して曖昧な返事をしたことに驚いていた」と記している。⁽¹⁴⁾

同日、一二月二日 (金曜日) の午後、パークスは、グレイの事務所で、キングがボイコットの陣頭指揮をとると知らされ、それは心強い知らせだったと、言っている。⁽¹⁵⁾ パークスは、デクスター街バプテスト教会にはあまり行かなかったの⁽¹⁶⁾、その時 (一二月二日) まで、キングと親しい間柄ではなかった。とはいえ、一九五五年八月一四日に N A A C P 集会の特別講師として、キングがメトロポリタン合同メソジスト教会 (Metropolitan United Methodist

Church) に来て、パークスがそこでキングに初めて出会って以来、彼女はキングに良い印象をもっていた。⁽¹⁷⁾

同日、一二月二日(金曜日)、仕事を終えた後、パークスは、デクスター街バプテスト教会で行なわれる集会に出席した。そこで、パークスはキングに初めて直に会う。⁽¹⁸⁾

その集会でチラシが作成されることに決まり、その内容は、前日一二月一日(木曜日)の夜にロビンソンたちが作成したものを、もう一度簡潔に要約したものになった。その全文は以下の通りである。⁽¹⁹⁾

一二月五日の月曜日には、仕事に行くにも、町に出かけるにも、学校に行くにも、その他どこに行くにもバスに乗らないで欲しい。またまた黒人女性がバス座席を譲らなかったという理由で、逮捕され、投獄された。月曜日には、仕事に行くにも、町に出かけるにも、学校に行くにも、その他どこに行くにもバスに乗らないで欲しい。もし働くなら、タクシーに乗るか、自動車を乗り合わせるか、もしくは歩いて欲しい。これ以上の指示を受けるためには、月曜日午後七時からホールト・ストリート・バプテスト教会(Holt Street Baptist Church)で行なわれる大衆集会に来て欲しい。

一二月五日(月曜日)、パークスは、仕事には行かなかった。パークスは、裁判のために市庁舎に行った。⁽²⁰⁾パークスには、証言する機会が与えられなかった。パークスの弁護士になったチャールズ・ラングフォード(Charles Langford)とグレイは、無罪の申し立てはしたもの、問われている罪に対してパークスを弁護しようとはしなかった。それは、法廷に有罪判決を下させた上で、上告するのが目的だったからである。⁽²¹⁾

したがって、パークスは、バスにおける人種隔離法を犯したかどで有罪判決を受け、執行猶予になり、十ドルの罰金と四ドルの審判料を払うように命じられた。⁽²²⁾しかし、その後、パークスの弁護士であるグレイによる弁護で上告され、

パークスは罰金と審判料を払う必要は全然なかった。⁽²³⁾

同日つまり二月五日（月曜日）の昼食時に、ニクソン、アバナシー、エドガー・N・フレンチ（Edgar N. French, 1921-1979）⁽²⁴⁾の三人は、バス・ボイコットの延長を予想して、抗議運動を指導する新しい組織が必要なのではないかと話し合った。⁽²⁵⁾彼らがまったく新しい組織を結成しようとしたのは、N A A C Pのような既存の組織に運動を委ねるよりいいと思ったからである。「N A A C Pは、アラバマ州では比較的弱い団体で、大衆の組織ではなかった。会員数も少なく、会員を募るのも大変だった」。⁽²⁶⁾

同日午後三時に、市の黒人指導者数十名が、ロイ・ベネット（Roy Bennett）が牧するマウント・ザイオン A M E 教会（Mt. Zion A M E Church）に集合した。⁽²⁷⁾そこで、新しい組織の名称が、モンゴメリー改良協会（Montgomery Improvement Association, MIA）に決定した。また、デクスター街バプテスト教会の教会員であったルーファス・ルイス（Rufus Lewis）が、会議に遅刻して加わったキングを会長に推薦し、そのように決定がなされた。ニクソンは、財務担当係になった。ニクソンは、キングがリーダーになることを快く思わなかった。リーダーになりたいというニクソンの願望が挫かれたからである。しかし、パークスは、キングがリーダーになることを喜んだ。⁽²⁸⁾

キングが会長に選ばれたのは、彼が、モンゴメリーにおいても公民権運動においても、まだあまり知られていない人間であり、敵対者がいなかったからである。⁽²⁹⁾

以上述べてきたことからわかることは、キングは、モンゴメリー・バス・ボイコット運動を最初から組織し指導したのではなくて、パークス、ニクソン、ロビンソン、フレッド、アバナシーたちが準備した土壌に、後から登場してきたということである。しかし、このことは、モンゴメリー・バス・ボイコット運動におけるキングの貢献が低かったと言おうとしていることでは、もちろんない。

同日二月五日（月曜日）の夕方七時に、キングは、第一回モンゴメリー改良協会大衆集会における演説（Address

to the First Montgomery Improvement Association Mass Meeting) を、アラバマ州モンゴメリー、ホールト・ストリート・バプテスト教会にて行なった。

この教会は、一九五〇年代半ばのアラバマ州モンゴメリーのすべての黒人教会のなかで、おそらく最も貧弱な建物であった。またこの教会は、モンゴメリーのウエスト・サイドの最貧民街の奥深い場所にあつたため、白人たちはほとんど足を踏み入れなかつた。したがって、この教会は、黒人が大衆集会を開催する場所として最適であつた。⁽³⁰⁾

大衆集会に集まつた黒人は、教会堂内に千人、教会堂外に四千人、全部で五千人であつた、⁽³¹⁾という。集会は、黒人教会で通常行なわれている主日礼拝次第と同様に、次のような順序で進められた。⁽³²⁾

開会讃美歌 「キリストの兵士よ、前進せよ」(日本語讃美歌三七九番)

祈祷

聖書朗読

基調講演 キング

パークスとフレッド・ダニエルの紹介

決議 アバナシー

献金

閉会讃美歌 「わが祖国、そは汝のもの」(旧アメリカ国歌)

祝祷 ベネット

講演のなかで、キングは、パークスを、「立派な人柄のキリスト者」として紹介している。キングは、パークスのこ

とを、「モンゴメリーに住む最もすばらしいある一人の市民——単に黒人市民の一人というのではなく、最もすばらしいモンゴメリー市民の一人である」、「パークスは立派な方である。起こるべくして起こったこの事件がパークスのような方に起こったことを、私「キング」は幸いだつたと思う。なぜなら彼女はどこを叩いても埃が出るようなことのない誠実な方だからである。誰も彼女の人の高潔さを疑う人はいない。キリスト者として彼女が持っているイエスの教えへの深い従順と敬虔を誰も疑い得ない」と述べている。⁽³³⁾

分量としては多くないが、ここで、キングの非暴力思想がもうすでにはつきりと示されている。キングは言っている。「私たちは、暴力はふるわない」と。⁽³⁴⁾

キングは、モンゴメリー・バス・ボイコット運動を「キリスト者の運動」にしたいと述べている。「私はモンゴメリーの隅々まで、そしてこの国の果てまでも、私たちがキリスト者であることを知らしめたい。私たちはキリスト教を信じている。私たちはイエスの教えを信じている。(中略) 神を前面に立てて行かなければならない。私たちがこの運動を実践する際には、どんな場合でも、キリスト者らしくあらうではないか」。⁽³⁵⁾

そのほかにも、抵抗権や、団結の大切さにも触れている。⁽³⁶⁾

聴衆の割れんばかりの拍手とともに演説を締め括ったキングは、すぐに、感極まった様子のパークスのもとへ行き、彼女を抱きしめた。⁽³⁷⁾パークスのほうは、キングの演説について、次のような感想を抱いている。「キングの演説が終わって帰宅する途中、私は自分たちの抗議の声を言い表す適切な人をわれわれが得たことを悟った。そして月日が経過するにつれて、私にはわれわれが自分たちのモーセを発見したこと、そして彼は必ずわれわれを万民のための自由と正義の約束の地にまで導いてくれるだろうということが、明白になっていった」⁽³⁸⁾と。

集会で決めようとした主要事は、ボイコットを継続するかどうかということであった。全会一致でボイコット継続を支持した。同時に以下の決議をした。第一にバスの運転手は黒人乗客に対して礼儀正しい取り扱いをすること、第二に

隔離を維持した上で乗車順の着席にすること、第三に黒人が多い路線では黒人の運転手を雇用すること、という決議をした。⁽³⁹⁾

一二月八日（木曜日）、キングとグレイを含むMIAの役員たちは、市当局およびバス会社の役員たちと会い、黒人によるボイコットが隔離撤廃を目的とするものではないことを明確にした。その上で、MIAは、上記三項目を要求した。⁽⁴⁰⁾ この要求は、とても穏やかなものであったと言える。

一九五五年、パークスは、MIA役員会のメンバーであった。一九五六年秋には、パークスはMIAの広報委員会の座長をつとめていた。⁽⁴¹⁾

この頃、正確には一九五六年一月二七日深夜、キングは、コーヒー・カップの上の祈り（prayer over the cup of coffee）として知られている経験をする。それは、以下のような経験であった。

私は声を上げて祈った。（中略）「主よ、（中略）私はここで正しいと信じることに立ち上がったのです。しかし主よ、私は告白しなければなりません。私は弱いのです。私は倒れそうです。勇気を失いそうです。そして恐れています。（中略）私はもう力の限界にきています。もう何も残っていません。もう一人で立ち向かうことはできません」。するとその時、私は内なる声の静かな励ましの響きを聞き取ったように思った。「マーティン・ルーサーよ、大義のために立て。正義のために立て。真理のために立て。見よ、私はお前と共にいる。世の終わりまでも共にいる」。⁽⁴²⁾

プリンクラーによれば、パークスも、ほぼ同じ頃、キングと同じような経験をしている。⁽⁴³⁾ しかし、プリンクラーは、残念ながら、その資料を明らかにしていない。

一九五六年一月二三日、合衆国最高裁判所は、全員一致で、アラバマ州人権隔離法を無効にした。一九五六年二月二〇日付けで、モンゴメリーのバスは法的に人種統合され、一三ヶ月にわたるボイコットは終わりを告げることに⁽⁴⁴⁾なった。

世の注目目は、パークスからキングへほとんど完全に移行した。キング、アバナシー、ニクソン、そしてボイコットを支援した数少ない白人の一人であるグレン・スマイリー (Glenn Smiley) が、モンゴメリーで初めての人種差別のないバスに乗った。モンゴメリー・バス・ボイコット運動を始動させたパークスは、そこに招かれることはなかった。⁽⁴⁵⁾

一九五七年一月、アトランタでの黒人指導者たちの会合において、バプテスト派牧師の一団は、キングを、キリスト教を基盤とした公民権のための新組織——後に S C L C となる組織——の会長に選出した (会長職の正式な日付は二月一四日である)。⁽⁴⁶⁾ ここで、キングの主たる活動は、M I A の組織から S C L C の組織へと移っていくことになった。

III. デトロイト時代——キングの死まで——

パークスは、一九五七年八月に、モンゴメリーからデトロイトに移った。なぜデトロイトに移ったのか。プリンクリーによれば、ひっきりなしに続く殺人脅迫が、パークスをしてモンゴメリーを離れることを決意させた最大の理由だった。第二の理由としては、モンゴメリー市の白人の商業組合が、パークスを「トラブル・メーカー」であるとして、彼女が職を得られないようにした。しかし、パークスを最も苦しめたのは、友人だと思っていた人々から向けられた⁽⁴⁷⁾憤りの感情であつた。

一九五八年九月、キングからパークスに、キングの新著『自由への大いなる歩み (Stride Toward Freedom)』が送

られてきた。そこには、「ローザ・パークスへ。あなたの創造的な証言が、現代社会における自由への大きな一歩を導く偉大な力となったのです」(“To Rosa Parks: Whose creative witness was the great force that led to the modern stride toward freedom.”)と、パークスに対するキングの賞賛のことが添えられていた。⁽⁴⁸⁾

一九六一年、パークスは、エレイン・イーンソン・ステイールと出会う。二人とも、メソジストで、アラバマ州タスキギーの生まれという共通点があった。⁽⁴⁹⁾ステイールは、前述したように、一九八七年にパークスが「ローザ&レイモンド・パークス自己開発インスティテュート」を設立したときに、共同設立者になった人である。⁽⁵⁰⁾

パークスの教会生活は、デトロイトでは、どうだったか。パークスは、セント・マシューAME教会 (St. Matthew AME Church) の教会員であった。彼女がこの教会を選んだのは、彼女の従姉妹のアンニー・メイ・クルーズ (Annie Mae Cruise) が、この教会の教会員だったからである。一九六五年には、パークスは、同教会で、執事 (deaconess) になった。⁽⁵¹⁾

デトロイトに移ってからは、一九六二年九月に、バーミングハムで開かれたSCLC大会で、パークスはキングに会った。⁽⁵²⁾次にパークスがキングに会ったのは、一九六三年六月二三日、デトロイトでの「キングの大いなる自由への行進 (King's Great March to Freedom)」として知られる行事においてであった。⁽⁵³⁾キングは、その行事において、「コーボー・ホールでの自由を求める大会演説 (Address at the Freedom Rally in Cobo Hall)」を行なう。

この演説でも、キングは、非暴力の重要性を強調している。「この方法「非暴力の方法」は敵対者を武装解除する。(中略)この方法にはパワーがある。(中略)あなたの剣をおさめよ」と。⁽⁵⁴⁾

キングは、この演説の最後の部分で、「今日の午後、私には夢がある (I have a dream this afternoon.)」というフレーズを繰り返し返している。⁽⁵⁵⁾これは、その二カ月後に行なわれた「職と自由のためのワシントン大行進 (March on Washington for Jobs and Freedom)」において有名になった「私には夢がある」のフレーズと同じものである。

パークスは、その日(六月二三日)の午後の大半をキングと過ごした。奴隷解放宣言百周年を祝った、その日のキングの「コーボー・ホールでの自由を求める大会演説」は、パークスがこれまで聞いたものなかで最高のものだった。⁽⁵⁶⁾それから二カ月後の一九六三年八月二八日、パークスは、「職と自由のためのワシントン大行進」で、再びキングと会った。⁽⁵⁷⁾

「ワシントン大行進」の演説は、まず、奴隷解放宣言から百年たった現時点でも、黒人はまだ自由ではない、という内容から始まる。アメリカの創設者たちが独立宣言と憲法をつくったとき、彼らはそのなかに、白人と同様に黒人にも、生命・自由・幸福追求の譲渡すべからざる権利があることを記し、それを約束手形として渡したはずである。それにもかかわらず、アメリカは、黒人に対して、不渡り小切手を切ったので、今ワシントンに小切手を現金化するために来たのであると、キングは言う。⁽⁵⁸⁾

二カ月前の六月に、デトロイトの「コーボー・ホールでの自由を求める大会演説」で繰り返した「私には夢がある」というフレーズを、今回の「ワシントン大行進」の演説においても繰り返している。しかし、フレーズの内容と順序は、全く同一ではない。

最後に、この演説において、キングは、アメリカの「すべての山脈から自由の鐘を鳴り響かせよう! (From every mountain side, let freedom ring!)(旧アメリカ国歌の一部)」というフレーズを繰り返している。

パークスは、この「ワシントン大行進」の集會に、SCLCによって招かれた。⁽⁵⁹⁾しかし、パークスは、この集會に失望している。この大会が、性差別(sexism)で進化したからである。具体的には、女性のリーダーたちは、男性のリーダーたちと並んで行進することが許されなかったことや、女性は演説の依頼を受けなかったことなどである。パークス自身のことばを借りれば、次の如くである。⁽⁶⁰⁾

私「パークスは、公民権法を連邦の法律として成立させるために行なわれた一九六三年の「ワシントン大行進」にも参加した。女性はまだ大きな役割をもつことが許されなかった。大行進準備委員会は、コレッタ・スコット・キング (Coretta Scott King [1927-2006]) や他の男性指導者の妻たちが夫と一緒に行進することを好まなかった。その代わりに、彼女たちのための別の行進があった。また、キングがリンカーン大統領記念碑の前で有名な「私には夢がある」演説をした、あのプログラムには、女性のスピーカーは一人も入っていなかった。

一九六四年初頭、パークスは、後にミシガン州選出の民主党の下院議員になるジョン・コニヤーズ (John Conyers) の選挙運動に志願した。パークスは、コニヤーズのために、キングに演説を頼み、キングは、セントラル・メソジスト教会 (Central Methodist Church) で、演説を行なった。公職に就いたコニヤーズが最初にしたことは、パークスを雇うことだった。一九六五年三月一日に、パークスはコニヤーズの事務所で働き始めた。以後、一九八八年九月三〇日に退職するまで、二三年間、パークスは彼のもとで働いた。⁽⁶¹⁾

一九六五年初頭、キングとSCLCは、黒人の選挙登録運動であまり成果をあげていなかったアラバマ州セルマ (Selma) を、デモ行進の場所として、選んだ。キングは、セルマからモンゴメリーへの約五〇マイル (約八〇キロ) にわたる大行進を呼びかけ、その日を一九六五年三月七日に定めた。⁽⁶²⁾

一九六五年三月、パークスに、キングは依頼の電話をした。既に「流血の日曜日 (Bloody Sunday)」に関わっていたキングは、パークスに、アラバマへ戻って、次のモンゴメリーへの行進 (三月二五日) に参加してほしいと頼んだ。⁽⁶³⁾ パークスは、モンゴメリーのダウンタウン近くの最終ラップで、行進に参加するように招かれた。⁽⁶⁴⁾

セルマを出発しモンゴメリーに到着した一九六五年三月二五日に、キングは、アラバマ州会議事堂前にて、モンゴメ

リーへのセルマ行進の終結演説 (Address at the Conclusion of the Selma to Montgomery March) を行なう。その内容のポイントは、以下の通りである。

「モンゴメリーからバーミングハムへ、バーミングハムからセルマへ、そしてセルマからモンゴメリーへという円環を描いた足跡は、長くまたしばしば流血を伴うものであったが、今や闇を抜け出て公道 (highway) になった」。そのようにキングは宣言する。⁽⁶⁶⁾

キングは、この講演において、「前進」という語をキー・ワードとして使っている。例えば、「私たちは前進しているのだ。(We are on the move.) そうだ、私たちは前進している。(中略) 私たちは自由の国に向かって前進しているのだ。それゆえ私たちはアメリカの夢の実現に向かって、勝利の前進を続けて行こう」と。⁽⁶⁶⁾

その際、つまり前進して行く際、「非暴力」によって前進するように、ここでも非暴力の重要性を強調している。「それゆえ私は今日の午後前進して行くにあたって、皆さんに、非暴力 (nonviolence) に留まれ、ということをお願いしたい。私たちが目指しているのは、白人を打ち負かすことでも辱めることなく、彼「白人」の友情と理解を獲得することである」と。⁽⁶⁷⁾

最後に、キングは聴衆に向かって言う。「その時「人間が人間として生きられる日のこと」はいつなのか。もうすぐだ。なぜなら道徳的宇宙の弧はどんなに長くても、正義に向かって曲がっているからだ。(中略) 主の真理は進んで行く。(中略) われらの神は進まれる」と。⁽⁶⁸⁾

ジョン・ルイス (John Lewis) は、「われわれがついにアラバマ川を越えてモンゴメリー市に入った時、それはあたかもわれわれ自身自身の紅海、われわれ自身自身のヨルダン川を渡るような思いであった。こうしてわれわれはついに、一九六五年三月二五日、木曜日に、州会議事堂の階段に到達することができた」と言い、また「この行進はイスラエルの子たちをエジプトから導き出すモーセのようだった」と記している。⁽⁶⁹⁾

このようにして、セルマ行進は、一九六五年八月に、ジョンソン大統領をして黒人の選挙権に関する公民権法に署名させ、正式な連邦の法律として成立させることになった。

セルマ以後、パークスは、多人種組織である女性公共政策委員会 (the Women's Public Affairs Committee) への関与をより積極的に行なっていた。また、セルマ以後、パークスは、SCLCやNAACPの代表として公の場にたびたび現われ、全米黒人女性協会の終身名誉会員 (Honorary lifetime membership in the National Association of Colored Women) にもなった。⁽¹⁶⁾

このようにみてくると、パークスのなかには、あたかも二人の異なった人物が存在しているかのようである。ひとりには、伝統的な従順な黒人女性であり、もうひとりとは、みずからの人権を果敢に求めていく、現代的なそして急進的な黒人女性である。⁽¹⁷⁾

パークスが、キングのスピーチを最後に聞いたのは、一九六七年のSCLC大会においてであった。パークスにとつて、これが、キング生前の最後の出会いになった。⁽¹⁸⁾

IV. デトロイト時代——キングの死後——

キングは、一九六八年四月四日に、テネシー州メンフィス (Memphis) で、銃殺され、その生涯を突然閉じさせられた。その日、パークスの一部は、キングとともに死んだ、と彼女自身述べている (A part of Rosa Parks died with King that day)。⁽¹⁹⁾ したがって、パークスとキングとの交わりという点では、ここで本稿を閉じてもいい。しかし、キング死後にもパークスは、見落とすことができない思想的スタンスをとり、また重要な活動もしているのです、それらにつ

いて最後に触れておきたい。

キングとニコソンや、キングとアバナシーとの関係と違って、キングとパークスは、生涯信頼の気持ちをもち続けた。⁽⁷⁴⁾これは真実である。

しかし、キングの非暴力抵抗思想に関しては、パークスは、一定の理解を示しながらも、それには完全には従えないと思いつけていたことも真実である。パークスの次のことばが、そのことを表わしている。「今日に至るまで、私「パークス」は、すべての状況下で非暴力を完璧に支持するものではない。しかし、一九五〇年代と一九六〇年代の公民権運動は、キングと彼の非暴力主義への強い信念がなかったら、成功しなかつただろうと、確信している」。⁽⁷⁵⁾マルコムX (Malcolm X, 1925-1965) との出会いによって、それは強められた。

一九六五年二月に、マルコムXはニューヨークのハーレムで射殺された。暗殺される一週間前に、マルコムXがデトロイトを訪問したとき、パークスは、彼に会い、マルコムXを、温かくて、魅力のある人物だと感じている。⁽⁷⁶⁾そして、「マルコムXも非暴力主義の支持者ではなかつた」とパークスは言っている。⁽⁷⁷⁾

一方、キングはマルコムXを尊敬していたものの、キングはマルコムXがもつ暴力主義に関して次のように言っている。「暴力は非実際的であり、今やわれわれは以前にも増してわが社会における正義の統治と愛の支配に到達するため、非暴力の道を求めなければならない、そして憎悪と暴力は、もしわれわれが生き残るべきであるとするとするならば、無限地獄に投げ捨てなければならないということである」。⁽⁷⁸⁾ここには、キングとマルコムXとの相容れない思想的隔たりがある。パークスは、マルコムXのほうに共感している。キングとは違って、パークスは、彼女自身のことばとしてすでに引用したように、すべての状況下で、非暴力を完全に支持する者ではなかつた。⁽⁷⁹⁾

一九七七年四月三日付けのヴァージニア・ダー (Virginia Durr) への手紙で、パークスは、公民権運動の仲間たちから離れてしまったことを認めている。同時にそのことを嘆いてもいる。⁽⁸⁰⁾

この頃続けざまに、パークスは、夫と母を亡くす。一九七七年、夫が七四歳で亡くなった。一九七九年に、母が九一歳で亡くなる。

一九八七年、パークスの生来の夢だった、「ローザ&レイモンド・パークス自己開発インスティテュート」を、スティーブルと設立する。一一歳から一七歳までの社会的に恵まれない若者たちに、如何にしたら現代社会で尊厳と誇りをもつて (with dignity and honor) 生きることが出来るかを教えることがねらいだった。⁽⁸¹⁾一九八七年から二〇〇〇年の一三年間に、五千人以上の黒人の若者たちが「ローザ&レイモンド・パークス自己開発インスティテュート」のプログラムに参加した。⁽⁸²⁾

パークスの母親は、教育の大切さを常に感じていた。そのような母親の影響を受けて育ったパークスも、教育に多大の関心をもっていた。特に次代の黒人の若者を教育することに責任を感じていた。そのことが、「ローザ&レイモンド・パークス自己開発インスティテュート」の設立につながっていったと言える。

V. おわりに

以上述べてきたことは、第一に、キングは、モンゴメリー・バス・ボイコット運動を最初から組織し指導したのではなくて、パークス、ニクソン、ロビンソン、フレッド、アバナシーたちが準備した土壌に、後から登場してきたということである。しかし、このことは、モンゴメリー・バス・ボイコット運動におけるキングの貢献が低かったということではまったくない。

第二に、キングとニクソンや、キングとアバナシーとの関係と違って、キングとパークスは、生涯信頼の気持ちをも

ち続けたことは真実であるが、キングの非暴力抵抗思想に関しては、パークスは、一定の理解を示しながらも、それは完全には従えないと思いついて続けたことも真実である。マルコムXとの出会いによつて、それは強められた。

第三に、キング個人ということではないが、組織(MIAやSCLCなど)には性差別(sexism)があることを示した。本論で明らかにしたように、モンゴメリーで人種差別のないバスに最初に乗ったのは、キング、アバナシー、ニクソン、白人のスマイリーの男性たちであつた。モンゴメリー・バス・ボイコット運動を始動させた女性のパークスは、招かれなかつた。また、以下のことも本論で示したように、「職と自由のためのワシントン大行進」においても、女性のリーダーたちは、男性のリーダーたちと並んで行進することを許されず、演説の依頼も受けなかつた。

キングとの交わりということではないが、最後に、次代の黒人の若者を教育することに責任を感じていたパークスが、一九八七年、「ローザ&レイモンド・パークス自己開発インスティテュート」を、ステイールと設立したことについて触れた。

注

- (1) 森田美千代「ローザ・パークスの生涯——マーティン・ルーサー・キング・ジュニアとの出会いまで——」『キリスト教と諸学』二六号、聖学院キリスト教センター、二〇一一年、一七一—一八七頁。
- (2) 同論文、一八一—一八二頁。Douglas Brinkley, *Rosa Parks* (New York: A Lipper/Viking Book, 2000), 99-100; ダグラス・ブリंकリー『ローザ・パークス』中村理香訳、岩波書店、二〇〇七年、一〇五頁。
- (3) Clayborne Carson, ed., *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.* (New York: Warner Books, 1998), 51; クレイボーン・

- カーソン編『マーティン・ルーサー・キング自伝』 梶原寿訳、日本基督教団出版局、二〇〇一年、七二頁。
- (4) *Ibid.*, 51; 梶原訳、七二頁。パークスは、モンゴメリー女子実業学校で一番学んだことは、「自分は尊厳と自尊心をもった人間である (I am a person with dignity and self-respect.)」ということだったと、述懐している。Rosa Parks, *My Story* (New York: Puffin Books, 1992), 49; ローザ・パークス『ローザ・パークス自伝』高橋朋子訳、潮出版社、一九九九年、五二頁。
- (5) Brinkley, 110; 中村訳、一一六頁。傍点は筆者による。
- (6) Parks, *My Story*, 124; 高橋訳、一三九—一四〇頁。
- (7) Brinkley, 84, 121; 中村訳、八八頁、一二八頁。
- (8) Parks, *My Story*, 126; 高橋訳、一四三頁。
- (9) *Ibid.*, 126; 高橋訳、一四三頁。Brinkley, 122; 中村訳、一二九頁。
- (10) *Ibid.*, 122; 中村訳、一二九頁。
- (11) この教会は、一九五五年現在、モンゴメリー市では、最古かつ最大の黒人バプテスト派教会であった。Brinkley, 123; 中村訳、一三〇頁。
- (12) *Ibid.*, 124; 中村訳、一三二頁。
- (13) Martin Luther King, Jr., *Stride Toward Freedom: The Montgomery Story* (New York: Harper San Francisco, 1958), 45; マーティン・ルーサー・キング『自由への大いなる歩み——非暴力で闘った黒人たち——』雪山慶正訳、岩波新書、一九五九年、四四頁。
- (14) Brinkley, 124—25; 中村訳、一三二頁。
- (15) *Ibid.*, 127; 中村訳、一三四頁。
- (16) Parks, *My Story*, 135; 高橋訳、一五四頁。
- (17) Brinkley, 127; 中村訳、一三四頁。
- (18) Parks, *My Story*, 129; 高橋訳、一四七頁。
- (19) Parks, *My Story*, 130; 高橋訳、一四七—一四八頁。King, Jr., *Stride Toward Freedom*, 48; 雪山訳、四八—四九頁。Carson, ed., 52; 梶原訳、七二頁。
- (20) Parks, *My Story*, 132; 高橋訳、一五〇頁。Brinkley, 130; 中村訳、一三七頁。
- (21) Parks, *My Story*, 134; 高橋訳、一五二頁。

- (22) Ibid., 134; 高橋訳' 一五三頁。
- (23) Rosa Parks, *Quiet Strength* (Michigan: Zondervan Publishing House, 1994), 25; ローザ・パークス『勇氣と希望』高橋朋子訳、サイマル出版会' 一九九六年' 四二頁。
- (24) その当時' A M E ザイオン教会ヒラード・チャペル牧師であった。
- (25) King, Jr., *Stride Toward Freedom*, 55; 雪山訳' 五九—六〇頁。Carson, ed., 56; 梶原訳' 七六頁。
- (26) Parks, *My Story*, 135; 高橋訳' 一五三頁。
- (27) King, Jr., *Stride Toward Freedom*, 55-56; 雪山訳' 六〇頁。Carson, ed., 56; 梶原訳' 七六頁。Brinkley, 134; 中村訳' 一四二頁。
- (28) Ibid., 135-36; 中村訳' 一四三頁。
- (29) Parks, *My Story*, 136; 高橋訳' 一五五頁。Carson, ed., 56; 梶原訳' 七七頁。
- (30) Brinkley, 137; 中村訳' 一四五頁。
- (31) 梶原寿『み足の跡をたいて』新教出版社' 二〇〇〇年' 二六頁。
- (32) Clayborne Carson, ed., *The Papers of Martin Luther King, Jr. Vol. III* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1997), 70; 梶原' 二六一—二七頁。
- (33) Carson, ed., *The Papers of Martin Luther King, Jr. Vol. III*, 72; Clayborne Carson and Kris Shepard, ed., *A Call to Conscience* (New York: IPM and Grand Central Publishing, 2002), 8; クレンボーン・カーソン・クリス・シェパード編『私には夢がある——M・L・キング説教・講演集——』梶原寿監訳、新教出版社' 二〇〇三年' 二〇—二二頁。
- (34) Carson, ed., *The Papers of Martin Luther King, Jr. Vol. III*, 72; Carson and Shepard, ed., 9; 梶原監訳' 二二頁。
- (35) Carson, ed., *The Papers of Martin Luther King, Jr. Vol. III*, 72-73; Carson and Shepard, ed., 9-11; 梶原監訳' 二二—二三頁。
- (36) Carson, ed., *The Papers of Martin Luther King, Jr. Vol. III*, 73-74; Carson and Shepard, ed., 10-12; 梶原監訳' 二二—二四頁。
- (37) Brinkley, 139; 中村訳' 一四八頁。
- (38) Carson and Shepard, ed., 4-5; 梶原監訳' 一七頁。
- (39) King, Jr., *Stride Toward Freedom*, 63-64; 雪山訳' 七一—七二頁。Carson, ed., *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.*, 61; 梶原訳' 八二頁。
- (40) Parks, *My Story*, 141; 高橋訳' 一六二頁。Brinkley, 143-44; 中村訳' 一五二頁。

- (41) Brinkley, 145, 167; 中村訳、一五三頁、一七七頁。
- (42) King, Jr., 134-35; 雪山訳、一六八―一六九頁。Carson, ed., *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.*, 77-78; 梶原訳、一〇〇頁。Brinkley, 149-50; 中村訳、一五八―一五九頁。
- (43) *Ibid.*, 150; 中村訳、一五九頁。
- (44) King, Jr., 160, 170; 雪山訳、二〇六頁、二二六頁。Carson, ed., *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.*, 93, 95; 梶原訳、一七八頁、一二二頁。
- (45) Parks, *My Story*, 157; 高橋訳、一七八頁。Brinkley, 170; 中村訳、一八〇頁。
- (46) *Ibid.*, 172; 中村訳、一八二頁。
- (47) *Ibid.*, 175; 中村訳、一八五頁。
- (48) *Ibid.*, 180; 中村訳、一九〇頁。
- (49) *Ibid.*, 182; 中村訳、一九二頁。
- (50) *Ibid.*, 213; 中村訳、二二五頁。
- (51) *Ibid.*, 189-90; 中村訳、二〇〇―二〇一頁。
- (52) *Ibid.*, 183; 中村訳、一九三頁。
- (53) *Ibid.*, 184; 中村訳、一九四頁。
- (54) Carson and Shepard, ed., 66, 67, 68; 梶原監訳、八四頁、八五頁。
- (55) *Ibid.*, 71-73; 梶原監訳、八九―九一頁。
- (56) Brinkley, 184; 中村訳、一九四頁。
- (57) *Ibid.*, 185; 中村訳、一九五頁。
- (58) Carson and Shepard, ed., 81-82; 梶原監訳、九九―一〇〇頁。
- (59) Brinkley, 185; 中村訳、一九五頁。
- (60) Parks, *My Story*, 165-66; 高橋訳、一八七―一八八頁。Brinkley, 185; 中村訳、一九五―一九六頁。
- (61) *Ibid.*, 9, 187-88; 中村訳、一〇頁、一九七―一九八頁。Parks, *My Story*, 176; 高橋訳、二〇〇頁。筆者は、キングがセントラル・メソジスト教会で行なった演説の第一次資料を、まだ入手していない。このコンヤースが、議会にキング祝日法案を初めて提出した人である。黒崎真「米国におけるキング牧師連邦祝日制定と非暴力という遺産」『神田外語大学紀要』第

二二号、神田外語大学、二〇〇九年、四七七―四九九頁。

- (62) Parks, *My Story*, 167-68; 高橋訳、一九〇―一九一頁。
- (63) Brinkley, 195; 中村訳、二〇六頁。
- (64) Parks, *My Story*, 168; 高橋訳、一九一頁。
- (65) Carson and Shepard, ed., 122; 梶原監訳、一四〇頁。
- (66) *Ibid.*, 125-26; 梶原監訳、一四三―一四四頁。
- (67) *Ibid.*, 130; 梶原監訳、一四九頁。
- (68) *Ibid.*, 131-32; 梶原監訳、一五〇―一五一頁。
- (69) *Ibid.*, 114, 115; 梶原監訳、一三三頁、一三四頁。
- (70) Brinkley, 201-02; 中村訳、二二三頁。
- (71) *Ibid.*, 98; 中村訳、一〇三頁。
- (72) *Ibid.*, 204; 中村訳、二二五頁。
- (73) *Ibid.*, 205; 中村訳、二二七頁。パークスはすぐにメンフィスに向かった。また、キングの葬儀に参列するのに、歌手のハリー・メラフォンテ (Harry Belafonte) が、パークスを自家用飛行機でアトランタに連れて行ってくれた。Parks, *My Story*, 179-80; 高橋訳、二〇四頁。
- (74) 猿谷要「アメリカ社会変革の起爆剤」『ローザ・パークス』ダグラス・ブリンクリー著 中村理香訳、岩波書店、二〇〇七年、二六四―二六五頁。
- (75) Parks, *My Story*, 175; 高橋訳、一九七頁。
- (76) *Ibid.*, 177; 高橋訳、二〇一頁。Brinkley, 192; 中村訳、二〇三頁。
- (77) *Ibid.*, 193; 中村訳、二〇四頁。
- (78) Carson, ed., *The Autobiography of Martin Luther King, Jr.*, 269; 梶原訳、三二八頁。
- (79) Parks, *My Story*, 175; 高橋訳、一九七頁。
- (80) Brinkley, 209; 中村訳、二二二頁。
- (81) *Ibid.*, 213; 中村訳、二二五頁。
- (82) *Ibid.*, 215; 中村訳、二二八頁。